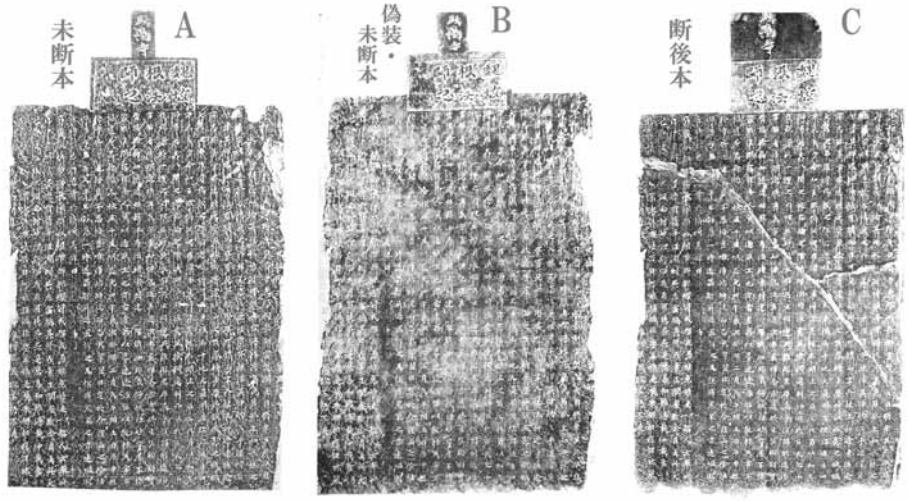
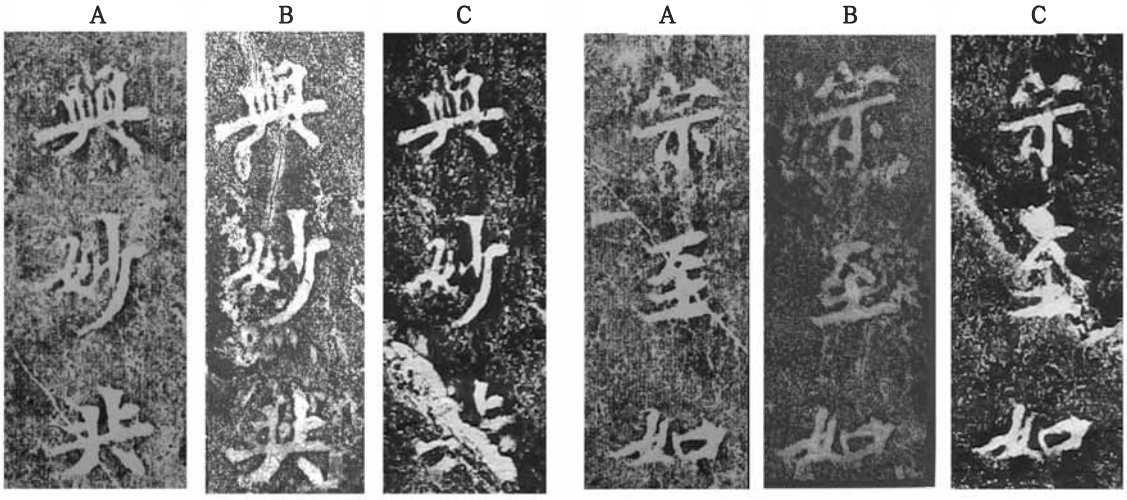
主図版「馬鳴寺根法師碑・未断本」

趙世駿題簽

「落ち穂拾い記」58
「馬鳴寺根法師碑」下

図① 三種拓本 ＡＢＣ 比較





明治の書壇に大きな影響を与えた金石家・楊守敬は、「馬鳴寺根法師碑」を伸びやかな独特の趣を具えた北魏楷書の逸品であり、後の宋代の蘇東坡の楷書に似る所があると記している。前号で示した拓は、原石が大きく斜めに断裂し、幾つかに割れた以後の拓である。普通に流布する拓本は、「断後拓本」である(図①のC)。碑法帖の影印本に採用されているのは、碑石が大きく断裂する前に拓された「未断拓本」が多い(図①のA)。書跡名品叢刊にも未断の(剪装)拓本が収録されている。「断後拓本」と「未断拓本」を比較すると断裂部にあたる20数字は、一部が欠けたり、文字が失われたものもある。この碑の未断拓本は、大変珍しい。私も30代頃に、神保町の古書店の書棚から偶然に未断本と認識せずに購入した。紺の書帙が付され、淡い精拓の剪装本であった。鑑蔵印はなく、表紙の題簽には、「魏根法師碑 未断本　山木盦収蔵」とあり、魏晋の小楷を彷彿とさせるような美事な書であった(主図版)。しばらくしてから過去の影印された未断本等と比較しても遜色のない旧精拓であると認識した。各種の資料と比較検討している過程で、「偽装未断拓本」の存在を知った。偽装未断拓本とは、断裂した碑を取拓する前に、破損している部分を蝋や石膏などで埋め、碑面を整えて、失われた文字を刻してから取拓したものである。三者比較すると一目瞭然である。未断拓本は、後に断裂する部分には、極細いひび割れが明確に見る事が出来るが、偽装拓本は、断裂部にあたる部分の偽装が雑である。丁寧に比較すれば、明確に判別出来る(図①のB)。戦後版の平凡社の「書道全集」にも偽装未断整拓本が、部分図版で収録されている。家蔵本の旧題簽の筆者・山木盦とは、清末民国期の著名な金石収蔵家・趙世駿(1863～1927、字は声伯、自ら山木盦主人と号す。碑帖の鑑別収蔵に優れる)である。拓調の優れた趙世駿旧蔵の未断本である(主図版)。趙世駿旧蔵本は、戦前に日本に将来され、三井聴氷閣や上田桑鳩等に収蔵された宋拓、明拓、初拓などの名品をこれまで数件目にしたことがある。

伊藤滋(書斎名・木鶏室)

書のひろば

理事長　下谷洋子

公益社団法人全日本書道連盟
理事会開催

9月12日(木)上野精養軒にて全日本書道連盟の理事会が開催されました。

議事

1. 書写・書道教育推進協議会ならびに日本書道ユネスコ登録推進協議会の活動状況について
2. 令和6年度書写書道教育講演会の報告
・6月6日総会終了後開催した。
演題「筆順の変遷からみる書写書道教育」
講師　松本仁志先生(全国大学書写書道教育学会理事長)
(聴講者107名)
講演録を11月頃発行予定の連盟会報に掲載する。
3. 令和6年度夏期書道大学講座の報告
・8月2日～4日開催した。
講師
8月2日
〈楷書〉　堀　吉光先生
〈かな〉　齊藤　紫香先生
8月3日
〈篆刻〉　真鍋　井蛙先生
8月4日
〈行書・草書〉
山口　啓山先生
〈漢字かな交じり書〉
西村　大輔先生
4. 令和6年度書道講演会について
来年(2025年)度は、8月1日～3日。
(11月)
日時　令和6年11月7日(木)
14時～15時半
会場　国立新美術館講堂
講師　富田　淳氏
九州国立博物館館長
演題　「王羲之の眼差し、王羲之への憧憬」
○詳細は52ページ参照
5. 令和6年度助け合い募金について
(11月～12月)
維持団体・賛助団体に対して協力依頼。
6. 参与・評議員への委嘱推薦について
各団体から推薦書が提出され、個々に委嘱の可否を審議した。
7. その他
―文化庁「芸術系強化等担当教員等全国研修会」への講師派遣依頼について―
文化庁では令和元年から「芸術系等担当教員等全国研修会」を開催、芸術系強化・科目の教員を対象とした研修を行っている。
書道は東京学芸大、福岡教育大、愛知教育大、大阪教育大が研修に協力しており、これまでは学校教育の範疇の内容で研修を行ってきた。今年度から、書道も学校教育を超えた芸術家による実演・講話の研修を加えたく、書道界から、全日本書道連盟に講師人選をお願いできないかと相談があった。書道家を講師とする第一弾として、漢字かな交じり書を専門とする先生を要望され次の通り決定した。
○文化庁主宰の教員研修に連盟から講師を派遣する
○今年度の講師には、永守蒼穹先生を派遣する
―助成申請について―
連盟会員が所属しているかどうか問わない（ただし、申請人は連盟会員とする)。「連盟会員がいるから助成する」とは考えず、公益的に助成を行うため。

「書道芸術」秋の昇級昇段試験終了

毎年恒例の本誌秋の昇段級試験が9月24・27日と行われました。今期の受験者は若干増加しました。
秋の三種は漢字・かな条幅・ペン字でした。四段以上は留め置きの制度を設けていますから、なかなか昇格できない方も出てしまいますが、課題の古典・古筆は秋・春とも決まっているので日頃からの学書が可能です。師範を目指す方には、均一な実力を求めます。来月号には結果報告を掲載しますので参考にされ、次回に備えて下さい。

佐久全国臨書展

近代の学書の方法論を体系的に確立したのは比田井天来です。その天来の故郷望月（佐久市）で、毎年秋に、佐久市立近代美術館を会場に「佐久全国臨書展」が開かれています。9月27・28日と、佐久全国臨書展の審査が行われました。〝現代の書〟の原点としての臨書を改めて問い直そうと企画され開催を続けてきました。会派を超えた審査員によるとても公平な審査です。出品は小学生から一般まで、まくりのまま出品できます。関心のある方は左記までお問い合わせください。

佐久市立天来記念館
TEL・FAX　0267-53-4158
(月曜日、祝日の翌日は休館)
第13回比田井天来・小琴顕彰
佐久全国臨書展
会期　11月23日～12月15日
会場　佐久市立近代美術館
TEL　0267-67-1055

漢字書基礎基本講座(5)

種谷萬城

楷書3　孔子廟堂碑

虞世南（558―638年）は、陳、隋に仕え、唐の太宗皇帝に仕えました。太宗は、虞世南の徳行、忠直、博学、文詞、書翰を『五絶』と称揚し重用しました。虞世南は、東晋時代の書聖王羲之の7代目の子孫・隋の智永に学んだと伝えられ、その書は王羲之の正統を受け継ぐ、品性の高い、整斉な書であり、彼は当時の書法の最高権威として、指導的立場に置かれました。『初唐の三大家』の一人として、楷書の完成期を創出した書道史上欠くことの出来ない人物です。

孔子廟堂碑は、太宗の勅命を受けて虞世南が撰書した石碑です。柔らかさの中に強さと気品がある書は、字形が整い、穏やかで品格が高く、温厚で謙虚な人柄が表現され、温雅、上品、情的と評される楷書の名品です。

拓本『欽明睿哲』

臨書「欽明睿哲」

倣書「温雅」

○臨書にあたっては、

1、穏やかな気分、素直な気持ちで書く。
2、筆はやや毛質の柔らかいものを用いる。
3、墨はやや淡墨。墨量はやや多め。
4、素直で静かな運筆をする。起筆、収筆は軽く。送筆は穏やかに。
5、直筆、順筆の用筆法。細く丸みのある線。
6、字形はやや縦長で向勢。中心部分を小さく、手足を長く。
7、余白を充分とる。

ユーチューブ『筆のサロン』に臨書と倣書の関連動画を配信しました。是非参考にして、穏やかな心地で孔子廟堂碑を学んで下さい。下のQRコードでアクセスできます。

筆のサロン
QRコード

――基礎基本講座――

篆刻・刻字基礎基本講座(5)

後藤大峰

前回までは字法、章法、そして刀法、いわゆる「篆刻三法」を、お話しさせて頂きました。

今回は、実際に篆刻に取り組む、初期段階の習得方法を、お話しさせて頂きたいと思います。

篆刻に限らず、漢字学習でも初期段階の習得手段に「古典の臨書」があります。

それと同様に篆刻にも「古典の臨書」とも言うべき、古来の印人の印を、「形・意」をそのまま臨模する習得方法があります。

通常、「摹刻（もこく）」と称します。これは、古（いにし）えからの任意の印を、前にお話しましたように「形・意」を念頭に臨模するものです。

布字（ふじ）（印材に実際に文字を書き入れること）する時は、正体ではなく、逆字に文字を書き入れます。

これを実際に彫り込んでいきます。

この時間は、正に、古えの印人との、語らいと言いますか、触れ合いと言いますか、あるときは「呉昌碩」と話をし、あるときは「趙之謙」と時を共にするという、篆刻を習得する者にとっては、正に醍醐味と言うか篆刻に、のめり込むというか、そういう時間であります。

どうか皆様、この時間を味わってみて下さい。

図の右が摹刻する印「呉昌碩　土方」

図の左が、筆者の摹刻作品です。

呉昌碩「土方」

大峰「模刻」

書道芸術院
令和の群像（2024）

令和２年書道芸術院秋季展「川口真理の句」　　北 嶋 菁 湖 書

北嶋菁湖

「馳せる想い」

令和元年7月18日に師匠砂本杏花先生が亡くなられてもう5年の月日が経ちます。雨降りしきるあの夏の日の悲しみと喪失感たるもの、筆舌に尽くし難いものでした。行く先を明るく照らし、厳しくも温かな師匠のご指導あっての私でしたので、独り暗闇に放り出されたような途轍もない孤独感に襲われました。これまで書を続けられたのは師匠のお陰だと肺腑に沁み入りました。

これからどう学びどう進めばいいのか立ち行かなくなった私を辻元大雲先生はじめ書道芸術院の先生方、種谷萬城先生はじめ白扇書道会の先生方、そして書友の皆さまのお力添えとお声がけのお陰さまで何とか書を続けさせて頂けることをここに改めて、心より御礼申し上げます。

今、私の指針である競書誌「書道芸術」は漢字、かな、現代詩文書、前衛、篆刻に至るまで豊富なメニューが楽しめる一流レストランのようです。それぞれの部門のエキスパートがあらゆる手法を駆使して最高の料理を提供して下さいます。私はこれらの料理を存分に味わって行きたいです。漢字は骨格、かなは品格、篆刻は審美眼、前衛は自らを解き放つ活力となって、きっと自身の作品を培ってくれると信じています。

『種谷扇舟の芸術観と人間』という御本に「心の持ち方がまちがっている人に、どうして立派な書が書けますか。」という一節がありました。筆を持つ前にまず心を磨くことが大切だということを心に刻んで、謙虚に先生方のご指導を仰ぎながら精進して参ります。

書道芸術院には、生きていく上で何が大切か、しっかり考えておられる先生方、考え続けることの尊さを教えて下さる先生方が大勢いらっしゃいます。この恵まれた環境の中で書を学べることに感謝し、地道に努力し続けることを怠ることなく、後進の指導にも励みたいです。そして砂本杏花先生がそうあられたように、心の中のあふれる想いを作品に精一杯表現していきたいと思います。その想いがいつか私自身に辿り着くものとして表現できたら、どんなに胸が高鳴るだろうと想いを馳せています。

掲載の作品は令和2年の「書道芸術院の書・現代詩文」展に出品した大作です。師匠を亡くした翌年の夏、汗と涙にまみれて書きました。

書道芸術院
令和の群像（2024）

第77回書道芸術院展「助奏」　　千葉華紅書

千葉華紅

「一本の線から広がる世界」

母校に赴任した40年前、書道の授業を担当なさっていた太田蓮紅先生との出会いと、先生のもとで書道に励んでおられた先輩書友からのお誘いが、これまでの長きにわたり活動してきた私の書のスタートです。

わかりやすく筋道を立てた御教授、合間の楽しい逸話や経験談、そして見事にピッタリな人生相談など、緊張感がありながら和やかさもあるお稽古の時間は、いつも心に満足感と安心感を与えてくれるものでした。

蓮紅社には先生が引率して下さる研修旅行がありました。紙や筆の工房で職人の方々の鮮やかな手捌きを見たり、真黒な採煙蔵の中で燈芯が燃え、その煤を集めて墨が出来るのを見学したり、普段何気なく使用している書道具が、拘りを持っている方々の手を抜かない仕事の上に出来ている事を目の当りにしたりしました。中国・台湾の旅行は、龍門石窟、碑林、故宮博物館等々、中国の悠久の文化を堪能した旅となりました。奈良、天理参考館では象牙色の甲骨に刻された小さな甲骨文字を見ました。只暗い手元で、刻まれた文字が発する光と陰は只ならぬ雰囲気を醸し出して、神との交信の証だと心に響きました。前衛書作品を書く時、紙に線を刻して新しい文字を生むという感覚になるのは、この時の強烈な印象があるからだと思っています。

文字は途轍もなく大きな力を持っています。文字をひとつ置くだけで、そこから限り無く広い世界が始まります。それが筆文字なら更にその世界は深く多様になります。読める文字を書かない前衛書では、何をどう伝えればいいのか、私の中で40年間、書くたびに迷う命題です。その時の自分の内なる思いを幾つかの点や線で引き出してやる。紙にその思いをのせられた時の満足感や解放感、それを求めてここまでやって来たのだと思います。

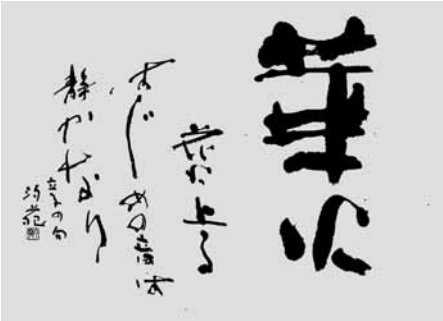
研修旅行で触れることができた広大な書の世界、前衛書制作に向き合う時の不思議な感覚、そこへ導いて下さった師への感謝、それらの思いを共有することができた書友の皆様への感謝、それら全てが私の大切な財産となっています。

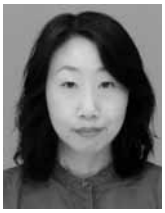
写真の作品は、径0.7㎝、筆鋒18㎝の長鋒尾脇毫筆を使いました。一本、渾身の線が引ければ、そこからイメージが広がります。筆触に感覚を集中させながら、墨の状態を調整し、運筆の速さを加減します。余白を大切にとの師の教えで余白を汚さないようにしながらも、時折、筆先から滴る墨滴や、筆のたわみから弾き出される飛沫も含めてなかなか思うようにいかない作品制作を楽しんだうちの一枚です。ねらって書いた線と偶発的な線とのバランスが何とかとれたと思います。

思いもかけずスタートした書の道でしたが、手を伸ばすほど大きく深く、耕すほど実りを見せてくれる世界と信じて、これからの時間を精一杯楽しんで書きたいと思っています。

令和6年度 新審査会員作品

大友 汐苑（現）・星野 栄子（か）・長南 一恵（現）

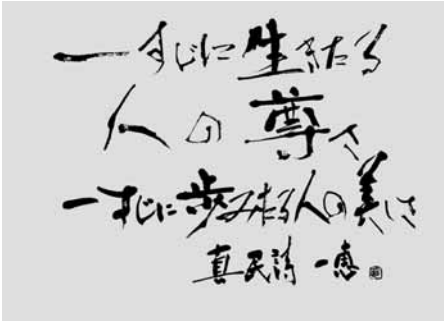




大友 汐苑
（宮城）

「星野立子の句」

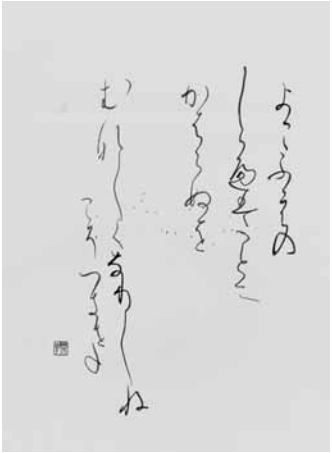
この度は、審査会員に御推挙頂き、ありがとうございます。熱心な御指導により、書の愉しみを呼び起こしてくださった坂本素雪先生をはじめ、伊呂波書の会の先生方に心より感謝申し上げます。いつか、花火が咲くように、心新たに精進してまいります。（汐苑）



長南 一恵
（宮城）

「一すじに」

この度は、審査会員に御推挙いただき有難うございます。飯沼恵鳳先生はじめ諸先生方の御指導と書友の励ましに感謝しております。書との出会いをこれまで通り大切にしながら、一本の道を極めていきたいと考えております。（一恵）



星野 栄子
（群馬）

「横笛の」

この度は、審査会員にご推挙いただき、誠にありがとうございます。

これも師の下谷洋子先生の御指導の賜と深く感謝申し上げるとともに、書泉会の皆様のお陰と思っております。

これからも「継続は力なり」の言葉を糧に、日々精進して参りたいと思います。（栄子）

本年度の「新審査会員紹介」は本号で終了となります。1月号から若手会員の紹介を行う予定でおります。

令和6年度第57回書道芸術院
単位認定講習会（倉敷）報告

会場＝ 倉敷市環境交流スクエア　水島愛あいサロン
期日＝令和6年8月18日（日）
主管＝山陽支局（支局長　大平邑峰）

残暑が格別に厳しい折、本年度の単位認定講習会を開催いたしました。本来山陽支局では、令和2年度の夏に開催予定でありましたが、新型コロナ感染症の発生によりその年のみならず翌年、翌々年と中止せざるを得ない状況となりました。昨年は北日本支局主管での開催となり、本年仕切り直しの山陽（倉敷）での講習会となりました。

この度の講習会は、院本部からのご指導により、コロナ禍の経験や諸般の事情を踏まえて、従来の宿泊型（一泊）の運営を一日（日帰り）で行うという新しい試みとしてのものとなりました。講義および実技科目では漢字、かな、現代詩文書をこれまでより少し長めの時間に設定して実施、講義のみの院史で他部門の概要に触れるという組み立てとなりました。

今回は特に短時間での学習の中身を充実させるため、講師の先生方には講習内容のビデオを作成していただき、YouTubeで視聴できるようにしました。受講者には事前にテキストを送付し、ビデオと合わせての予習をお願いしました。戸惑いもあったかもしれませんが、ほとんどの方がビデオを視聴してくださっており、皆さんの意欲の高さを感じることができました。

また、タイトな日程をスムーズに進行するために、当日は支局内の審査会員にはスタッフとして専念する体制をとらせていただきました。広島と山口からも応援いただき、支局が一つになって運営にあたることができました。

当日の参加者は次の通りです。

- 院派遣の講師・役員　6名
- 応援参加の院役員　4名
- 受講者　98名
- スタッフ　26名

○講義および実技
かな　講師　下谷洋子先生
「かなの基礎と古筆の見方」
執筆法から連綿の方法など、かなの基本を実演（揮毫風景をスクリーンに投影）しながら手ほどきしてくださいました。課題は、「高野切第一種または第三種から1首を選んで半紙に臨書する」でした。

○講義および実技
漢字　講師　種谷萬城先生
「楷書の学習」
北魏～唐における6種の楷書の古典を取り上げ、それらの特徴の違いを実際に臨書しながら説明（揮毫風景をスクリーンに投影）してくださいました。課題は、「半紙3枚に自身の名前を6種に書き分ける」でした。

○講義および実技
現代詩文書　講師　小竹石雲先生
「―清新さを求めて―　古典に学ぶ表現の工夫（蘭亭序・米芾 虹縣詩巻）」
書作のための豊かな発想力と表現力は、古典学習によって培われるというお考えのもと古典を応用した作品作りの手法を披露してくださいました。また、ご自身の作品原稿を見せながら「清新さ溢れる作品を目指してほしい」と力説されました。課題は、「半紙に蘭亭序の臨書とその応用作（詩文は各自用意したもの）」でした。また、コロナ禍中に後進のためにと執筆された「現代かな帖」を全員にプレゼントしてくださいました。一同感謝・感激でした。

○講義　書道芸術院の歴史
講師　下谷洋子先生
院の発足からの歴史を先人の功績と作品により解説してくださいました。途中、後藤大峰先生が篆刻・刻字の解説、千葉蒼玄先生が前衛書を解説してくださいました。視聴覚機器を使用しての解説はわかりやすかったと好評でした。

今回の講習で感じたのは、内容の濃いテキストやビデオに見られるような各講師の先生方の並々ならぬ受講者への思い、それに触発された受講者の皆さんの熱意でした。そしてそれらが会場でうまくかみ合って真剣な雰囲気の講習会になったと思っています。熱心にご指導くださった講師の先生方、応援くださった院役員の先生方、真剣に取り組んでくださった受講者の皆さん、サポートに専念してくださったスタッフのみなさんに心から感謝申し上げたいと思います。ありがとうございました。

追記　YouTubeにアップした動画は、「書道芸術院山陽支局」で検索していただくと視聴できます。

開講式　小竹常務理事激励の言葉

開講式　下谷洋子理事長あいさつ

“かな”下谷洋子先生 講義風景

“漢字”種谷萬城先生 講義風景

“かな”実技指導

“漢字”実演解説

“かな”課題制作

“漢字”受講者同士意見交換

“院史”下谷洋子先生 講義風景

“かな”実技指導

“院史”後藤大峰先生 刻字解説

“現代詩文”小竹石雲先生講義風景

“院史”千葉蒼玄先生 前衛書解説

“現代詩文”机間巡回指導

閉講式 山中清玉さん 謝辞

“現代詩文”小竹石雲先生著「現代かな帖」を参考に

書に関する人材育成事業・地方開催講演会

第25回書道芸術院　九州支局展開催

「いま、なぜ書か」

令和6年9月13日(金)～16日(月・祝)　コスメイト行橋

報告者　九州支局長　高田幽玄

九州支局展は会を重ねて、今年で25回の節目を迎えることができました。これも歴代支局長の先生方、阿保幽谷先生、池田遊子先生、牧泰濤先生はじめ多くの諸先輩方の御努力の賜物と感謝申し上げます。

今回の支局展には、辻元大雲顧問、下谷洋子理事長、小竹石雲常務理事、後藤大雲常務理事、千葉蒼玄常務理事の各先生方の作品を特別に展示させていただき、芸術院の多様性を高度な作品をもって示していただきました。九州支局会員の出品は漢字、現代詩文書、かなの70点でした。

13日は朝からNHKの取材があり、支局展の様子がその日のニュースで取り上げられました。

14日は辻元先生をお迎えし、その夜歓迎会を開きました。この会は行橋市長、行橋教育長、元教育長、毎日新聞西部本社事業部書道担当、NHK北九州放送局行橋支局長を迎え、大分、福岡、行橋の代表者を合わせて18名で開かれました。このような全国規模の展覧会が行橋で行われることはまことに喜ばしいとの市長の挨拶をいただきました。

15日は、辻元大雲先生による講演会がありました。参加者は会員、一般の方合わせて60名でした。テーマは「いま、なぜ書か」というもので、前半は、書の古典について。古典臨書の意義は、そこに自分の真実を見い出すことにある、戦後日本における書道界の毎日書道展を中心とした展開と成果について、ユネスコ無形文化遺産の登録その意義と内容について、等々。会場の壁には、先生が予めお書きになった半切臨書作品、甲骨文、金文から唐、日本に至るおよそ30点が飾られ、それらを背景に資料に基づき古典について丁寧に語られました。

後半は書の古典を実際にお話を交えて揮毫されました。集まった60名の受講生は、先生の実に楽しそうにお書きになる様子に感動していました。

午後は展示会場に場所を変え、作品に対する深い思いを熱く語られました。漢字・かな・現代詩文など、書のジャンル分けについて。作品というものはその作者の人間そのものだということ。そして会員の作品について、厳しくも温かいご指導をいただきました。その後も希望者のために揮毫して頂くなど、誠に熱のこもったご指導には一同感激いたしました。

以上、九州支局のみならず、他の書道団体、一般の書道愛好家そして開催された行橋市にとっても、大変意義深い展覧会であったこと、書道芸術院の強力なバックアップに感謝しつつ報告といたします。

辻元大雲先生範書（古典臨書）

辻元大雲先生を囲んで9/15　九州支局講演会

辻元大雲先生作品研究

辻元大雲先生講演「今、なぜ書か」

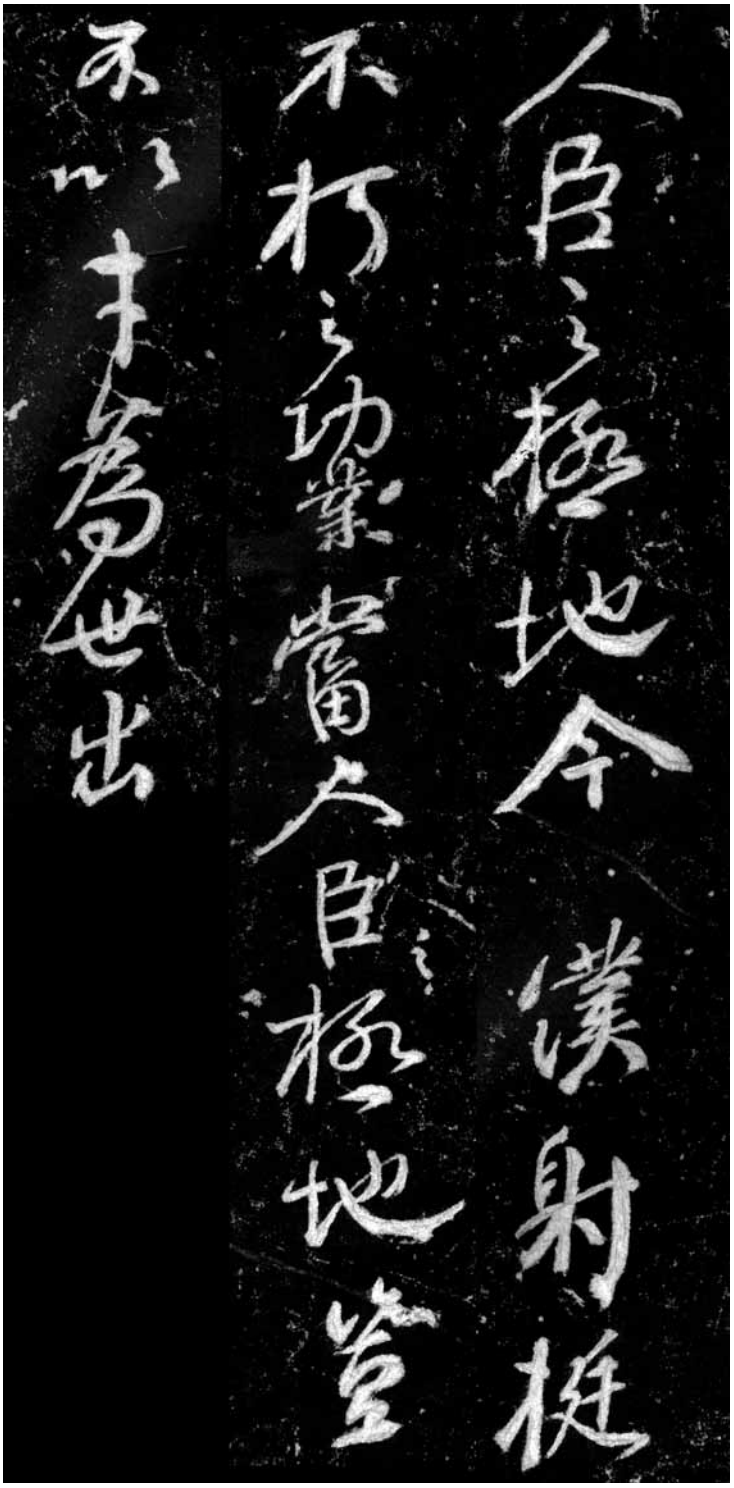
九州支局展　会場風景

九州支局展　会場風景

古典鑑賞 ㊸

争坐位文稿（顔真卿）①

※落款を必ず入れる。署名、もしくは〇〇臨（押印のみも可）



人臣之極地。今僕射挺／不朽之功業。當人臣之極地。豈／不以才爲世出。

（三井記念美術館蔵）

〈解説〉顔真卿が764年に郭英乂に与えた手紙の草稿である。内容は郭英乂が当時の実力者の魚朝恩に忖度し、公式の行事での席順を高位に上げたことに抗議したものである。草稿であるため、ところどころに訂正や追加の書入れがある。一気呵成に書き進められた行書の名品であり、感情の高ぶりが書に現れている。宮中のしきたりをかたくなに守ろうとする顔真卿のプライド、意志の強さ、剛直さが見て取れるであろう。

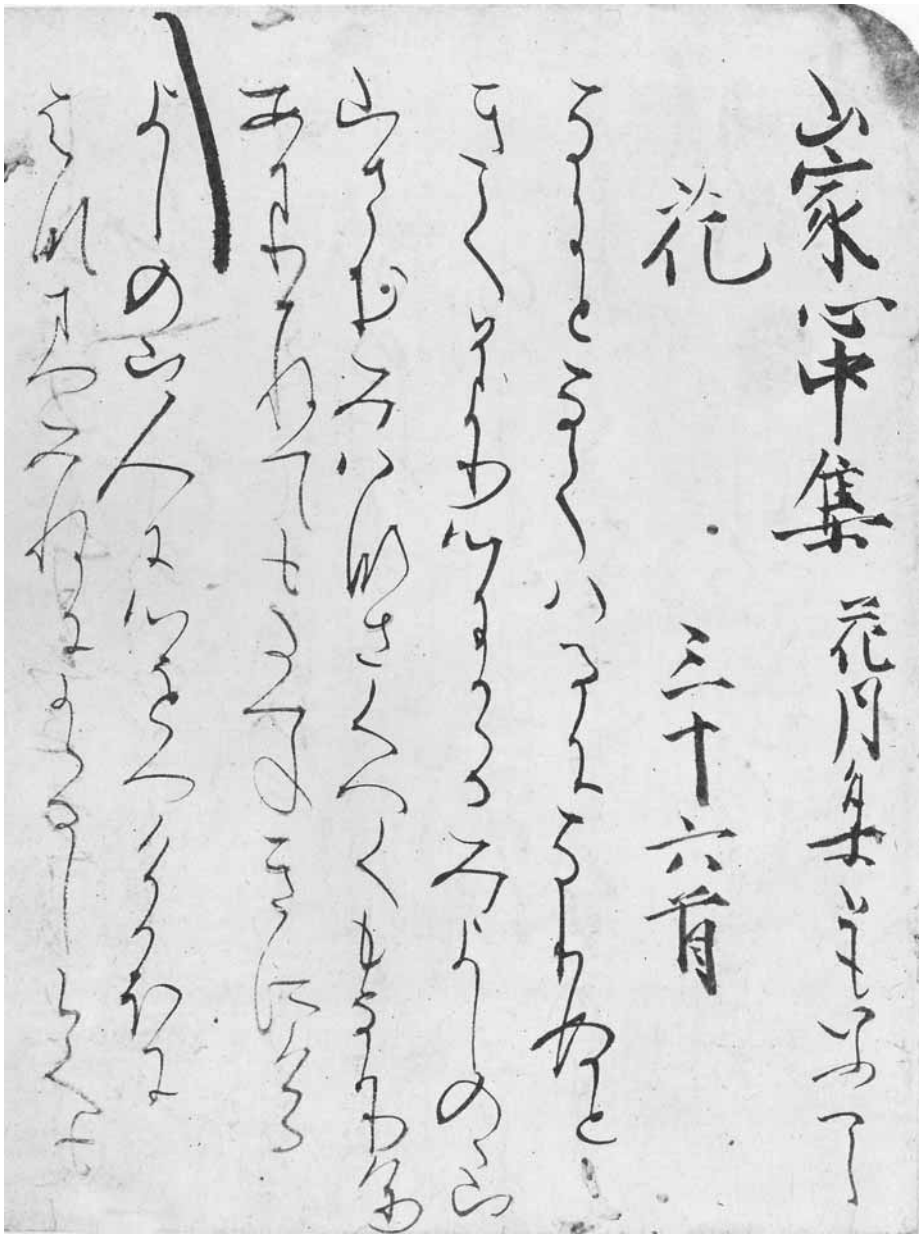
真跡は宋時代の終わり頃に失われたが、原石が西安碑林にあり、関中本と呼ばれている。「祭姪文稿」・「祭伯文稿」と合わせた「三稿」のひとつである。

顔真卿の楷書を嫌った米芾も「字々相連属飛動」し「天籟の気」があると述べ、「顔書第一」として絶賛している。（編集部）

※掲載図版原寸、ただし行立てについては変更しています

漢字研究部臨書課題	（半紙普通判・縦使用）上記掲載部分より何文字臨書してもよい。
特別研究部臨書課題	（A．大作の部―毎日展審査会員・会員サイズ以内、2×6尺・全紙も可 B．小品の部―半切⅓以上半切以内、全紙½以内も可（A・B縦横自由）） 当該古典の上記掲載部分以外も可。

㉗ 山家心中集（伝 西行筆）①



※古筆は原寸（以上も可）で臨書しましょう。なお、掲載図版は原寸です。

※落款を必ず入れる。署名、もしくは○○臨（押印のみも可）

◎「よしの山」の右側の太い斜線（合点）は書かなくてよい。

〈よみ〉

山家心中集 花月集ともいふべし

花 三十六首

なにとなくはるになりぬと
きく日より心にかゝるみよしのゝ山
山さむみはなさくべくもなかりけり
あまりかねてもたづねきにける
よしの山人に心をつけがほに
はなまつみねにかゝるしらくも

〈解説〉現存する西行の自筆の和歌は「一品経和歌懐紙」の2首である。その他に「伝西行」の書跡は数多くあるが真筆と確定しているものは無い。その中で「山家心中集」のうちのある一群は真筆に酷似している。今月から3回に分けて、その一部分を学習していくこととする。

冒頭の2行分は本文とは別の書き手の筆跡であり、「日野切」を書写した藤原俊成の手とされる。是非、学んでいただきたい。本文は、単純な線をきびきびと直線的に連ねている。品格を見失わないように丁寧に観察したうえで臨書されたい。（編集部）

かな研究部臨書課題	（半紙普通判（料紙可）・縦長に使用）別紙を裁断して貼付も可。半懐紙は半紙サイズに切って使用のこと。上記の古筆の掲載部分より歌一首以上を書く。（全臨も可）
特別研究部臨書課題	A．大作の部＝毎日展審査会員・会員サイズ以内、2×6尺・全紙も可 B．小品の部＝半切⅓以上、半切以内（縦横自由）、全紙½以内も可 ＜いずれも上記の掲載以外も可。＞

漢字規定 初段以上【11月15日締めきり】用紙 半紙普通判

種谷萬城選書

眞味只是淡　よみ（真味は只だ是れ淡）

書体＝自由

※51ページに筆順を示しました。

習い方解説 (1)

種谷萬城

眞味只是淡　（菜根譚）

（真味は只だ是れ淡）

濃厚な味は本物ではなく、本物の味はただ淡白なものである。（道に達した人は、奇異な才能を発揮する人ではなく、世間並みの尋常な人である。）

『菜根譚』は、人生の哲理を簡潔に著した語録です。今月は『菜根譚』中の語句を周の金文を基にして書きました。篆書（甲骨文・金文・小篆・印篆など）作品の制作には、専門の字典で校字し、蔵鋒・中鋒の筆法、左右相称・等分割など、楷行草書とは異なる書法の学習が必要です。古人の造字感性に触れ、漢字の成立を考察できる篆書の学習は大切です。左は、小篆を基にして書きました。

〈参考〉

漢字規定 秀級以下【11月15日締めきり】用紙 半紙普通判

西川翠嵐選書

志在千里　よみ（志は千里に在り）

書体＝楷書

習い方解説 (1)

西川翠嵐

志在千里　（曹操）

（志は千里に在り）

年老いても高い志を持ち続けているたとえ。

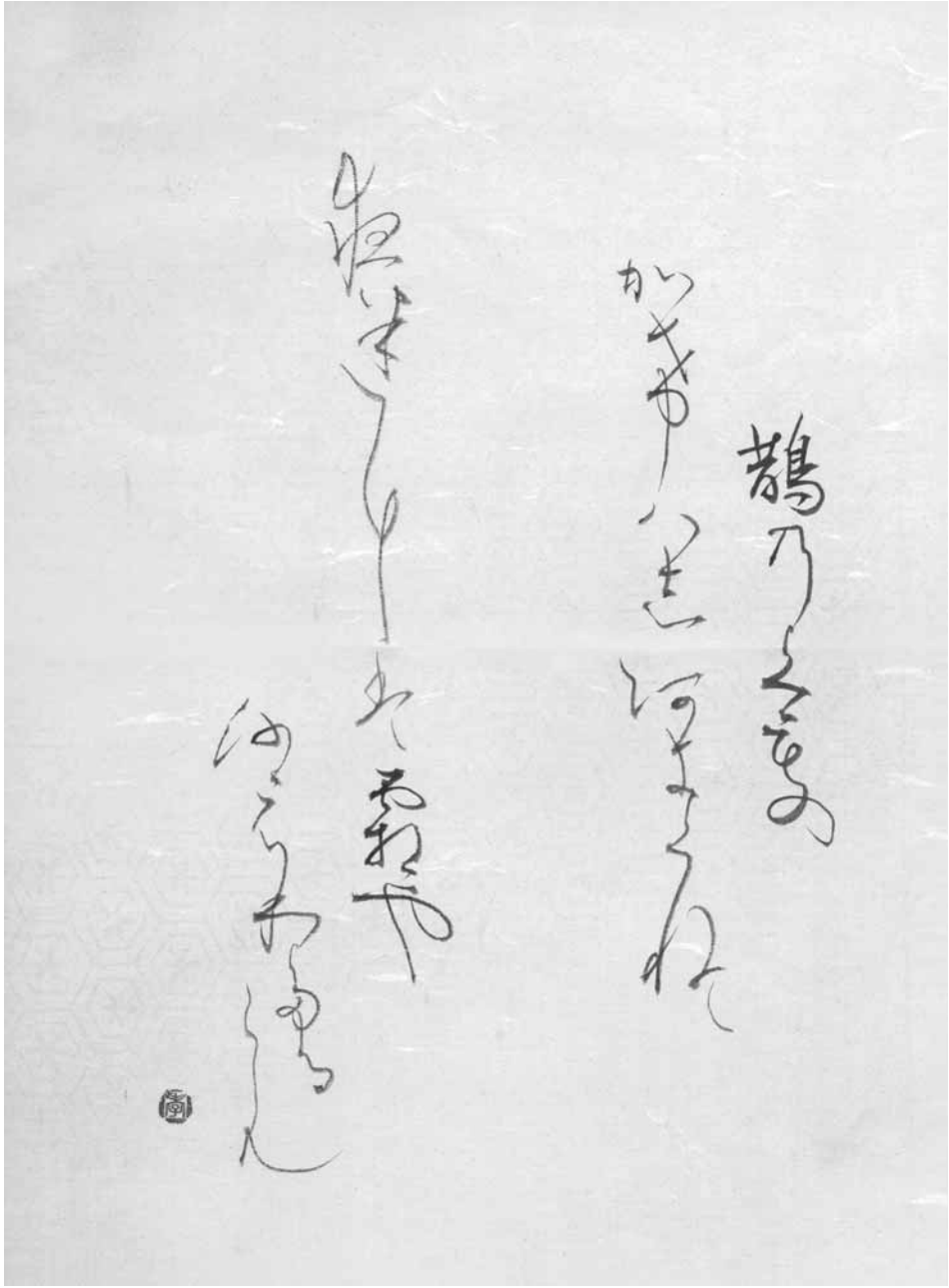
今回の4文字は比較的画数の少ない文字がそろいました。その分一画一画に生き生きとした表現がないと堅苦しいものとなってしまうでしょう。

「志」は古典では第3画が第1画よりも長いものも多々見られますが、今回は標準的に「士」としておきました。「在」は最後の横画の高さに注意を。「千」の第1画は思っているよりも左方向真横に近くはらいます。「里」は2画目の転折から終筆にむけてのリズムを大切にして下さい。

この語は、三国志でおなじみの魏の英雄・曹操の書いた詩の一節で「老いた馬にも千里の彼方にはせる思いがある。壮大な夢を忘れることなかれ。」とうたっています。

かな規定　初段以上【11月15日締めきり】用紙　半紙普通判（料紙可）

小島孝予選書



よみ方　鵲の(乃)雲(久毛)のか(加)け(希)は(八)し(志)秋(阿支)暮(久)れて
夜半に(耳)は(盤)霜や冴(沙)えわた(多)るらむ(无)

創作

＊料紙は半紙版(33.0×24.5㎝)を使用しましょう。半懐紙は上記のサイズに切って下さい。

習い方解説 (1)

小島孝予

鵲の雲のかけはし秋暮れて
夜半には霜や冴えわたるらむ
（寂蓮「新古今集」）

鵲がかけた雲の橋は、秋が暮れて夜中には霜が一面に白々と冴えていることであろうか

今回は「鵲」「夜半」「霜」の漢字がバランスよく配置できることをポイントにして構成しました。

墨付けの「鵲」「霜」では、やや墨をおさえて字を締めて書き、その周りには複雑な変体がなを避けることで調和させます。

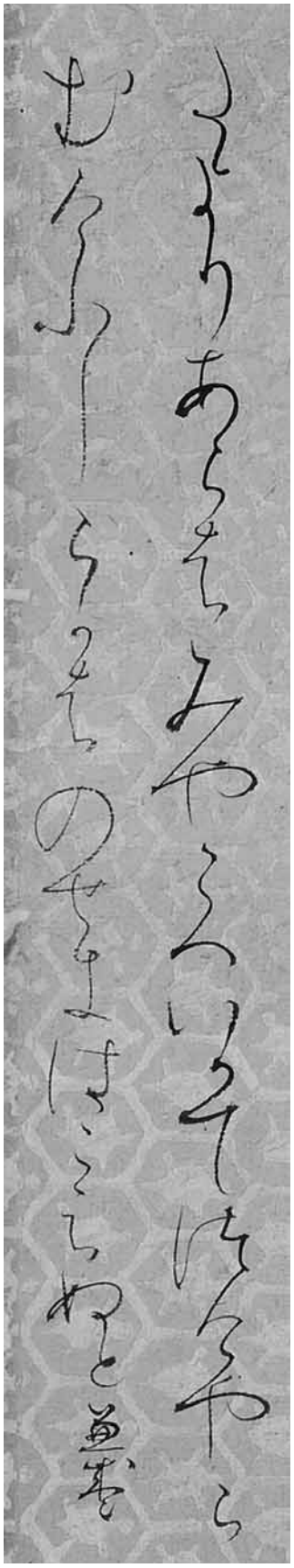
変体がなは字形が縦長・横長・丸型・ひし型・三角など色々とありますが、その組合わせによって行のデフォルメができ、隣合う行との響き合いが生まれます。そして連綿線によって、全体の大きな流麗さが表現できるのです。

行間余白も大切です。2行目と3行目の間に大きな余白を取ることで、大きな広がりと奥行きを表現できるようにしました。墨継ぎは「霜」です。

かな規定　秀級以下【11月15日締めきり】用紙　半紙タテ$\frac{1}{2}$（料紙可）（たて32センチ・よこ12センチ）

掲載写真の和歌を臨書する。部分臨書も可。〈注〉署名は「〇〇臨」。　粘葉本和漢朗詠集（掲載写真拡大120％）

※2行目下の「兼盛」は書かなくてよい。

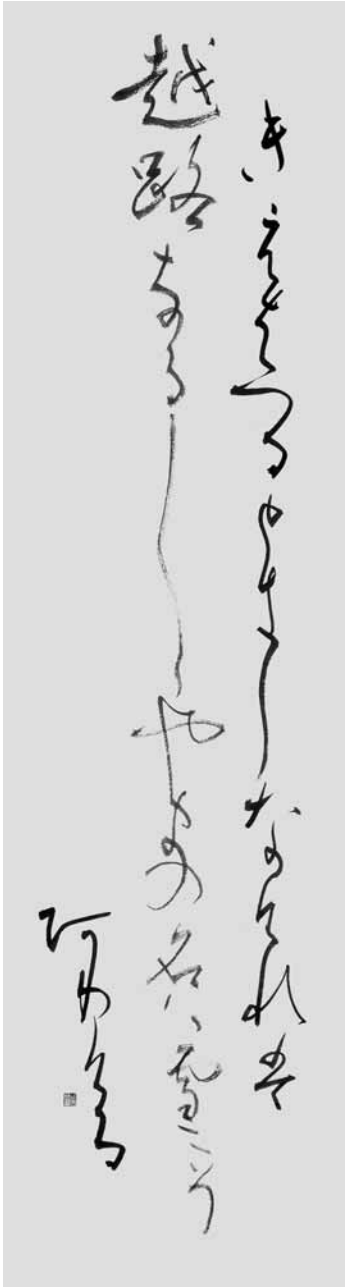


よみ方　たよりあらばみやこへいかでつげやら（多 者 可 徒介）
むけふしらかはのせきはこえぬと（介 支 可 者）

歌意　私についてのある人がもしあったとしたら、都へどうしても伝言したい。今日のこの日、まさに白河の関を越えることになったと。

かな条幅規定【11月15日締めきり】用紙　小画仙紙半切（料紙可）

佐藤希雲選書



よみ方　消(き)えは(者)つる時(と支)しなけ(介)れば(盤)越路な(奈)る
白山(しらや末)の名は(八)雪に(二)ぞ(曽)あ(阿)り(利)け(介)る

創作

※タテ形式に限る

習い方解説 (1)

佐藤希雲

消えはつる時しなければ越路なる
白山の名は雪にぞありける
（凡河内躬恒「古今集」）

白山の名の由来は、一年中、真っ白な雪が消えないところからくるのだ、という躬恒の歌です。

今回は3行書きにしてみました。前2行を少し右に寄せて、4字の最終行を右に流し、印を押すスペースを作りました。2か所に出てくる「し」の処理がポイント。墨継ぎは「阿」です。

漢字条幅規定　初段以上【11月15日締めきり】　用紙　小画仙紙半切

名越蒼竹選書

琪樹西風枕簟秋　楚雲湘水憶同遊　（杜牧）

（琪樹の西風枕簟の秋　楚雲湘水同遊を憶う。）

書体＝自由

漢字条幅規定　秀級以下【11月15日締めきり】　用紙　小画仙紙半切

川島舟錦選書

雲在嶺頭閑不徹　水流磵下太忙生　（雪竇語録）

（雲は嶺頭に在りて閑不徹　水は磵下を流れて太忙生）

書体＝自由

習い方解説 (1)

名越蒼竹

一般論ですが、半切に縦2行形式で書く時、動的な書体では様々な「変化」を盛り込むことが求められます。文字の大小・墨の潤渇・字と字の間隔等が変化の要素で、その結果行の流れが良く行間の響きが心地よい作品となれば、章法（作品全体のバランスの取り方）も成功するでしょう。14文字では字間の変化が特に重要です。

※タテ形式に限る

習い方解説 (1)

川島舟錦

山の上にはのどかな雲が浮かび、谷底では休むことなく水が流れる。すべてが、無心に織りなす自然の景色。忙しさの中にも不動の心があり、静けさの中にも鋭敏な精神が秘められているという境地……。昔も今も多忙な時には、求めるものは自然。長閑な風景に心癒やされ英気を養い、また……。繊細、杞憂は、作品作りをしているから。

ペン字規定【11月15日締めきり】

東福青篁選書

ゆく河の流れは絶えずして、しかも、
もとの水にあらず。淀みに浮ぶ
うたかたは、かつ消えかつ結びて、
久しくとどまりたる例なし。
鴨長明「方丈記」　青篁書

◇用紙　ハガキ大（14.8×10㎝）の白紙を使用
◇黒インクのペンを使用（ボールペン・フェルトペン可）

書体＝自由

ご注意!!
用紙の大きさにばらつきが見られます。
用紙サイズ（ハガキ大14.8×10㎝）を守って下さい。

習い方解説 (1)

東福青篁

今月から12月号まで担当させていただきます。よろしくお願い致します。

今回は齋藤孝氏の『声に出して読みたい日本語』より、鴨長明『方丈記』の冒頭文を課題に致しました。「世の中にある人と栖（すみか）と、またかくのごとし」と続く美しい響きを持った日本語で綴られていて、人の身と栖のはかなさをテーマに書かれた鎌倉時代の随筆です。なお、「うたかた」とは水に浮かぶ泡のことです。

味わい深いリズムに乗せて、力みのない自然な運筆で書き進めて下さい。

漢字はひらがなより強く、大きめに書きます。ただし、「口・日・山・小」など画数の少ない字は小さめに、「と・ら・こ・め」などのひらがなは意識して小さめに書くよう心掛けましょう。

ゆく河の流れは絶えずして、しかも
もとの水にあらず。淀みに浮ぶ
うたかたは、かつ消えかつ結びて、
久しくとゞまりたる例（たゞし）なし。
鴨長明「方丈記」　○○書

令和六年の二十四節気

九月七日　白露（はくろ）　二十二日　秋分（しゅうぶん）

十月八日　寒露（かんろ）　二十三日　霜降（そうこう）

十一月七日　立冬（りっとう）　二十二日　小雪（しょうせつ）

十二月七日　大雪（たいせつ）　二十一日　冬至（とうじ）

佐藤莱扇

令和六年の二十四節気／九月七日 白露（はくろ） 二十二日 秋分（しゅうぶん）／十月八日 寒露（かんろ） 二十三日 霜降（そうこう）／
十一月七日 立冬（りっとう） 二十二日 小雪（しょうせつ）／十二月七日 大雪（たいせつ） 二十一日 冬至（とうじ）／氏名

書体＝自由

佐藤莱扇書

（掲載手本85％に縮小）

◇小筆・筆ペン・サインペンなどを使用　署名は各自の姓名（号）を
◇用紙は普通版半紙横½（24.5×16.5㎝）　B５版コピー用紙（26.0×18.1㎝）も可
◇所定の出品券を作品の右下に貼る

今月のホープ作品・各部総評　NO.760

かな部　師範　山口　雪翠
やゝ淡墨のふっくらとした線に、3行目からの勢いが相俟って、豊かで大らかな紙面を創り上げた。
◎かな部総評　名前を入れた方は、概ね大きさを理解して上手く書かれていた。新鮮な表現が少なく残念だったが安定していた。（洋子評）

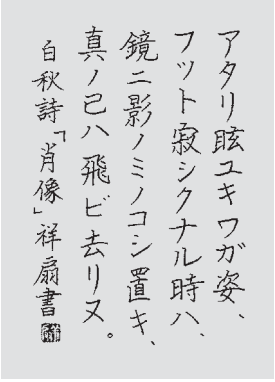
漢字条幅部　師範　板橋　雅邦
柔軟な線質で雄大な運筆が魅力的。大小疎密の変化が自然になされ美しい余白を醸しだしている。
◎漢字条幅部総評　書作に対して気の満ちた作が多かったことは喜ばしいことです。章法面で今一歩の推敲をしてほしい。（石雲評）

かな条幅部　五段　沼田　奎心
3行の構成が上手くまとまり、墨量の変化と連綿が美しく仕上がって情趣を感じる作。
◎かな条幅部総評　変体がなに誤字が多く見られた。わかっているから大丈夫は危険です。是非字典で再確認してください。（峰子評）

漢字部　師範　尾形　紅霞
線が上質で、澄み切り、爽快感がある。余白も綺麗で、上品な香りが漂い、高尚な作風の行書。
◎漢字部総評　上級の草書作品には、字形が不正確な作が多見された。字書で丁寧に校字し、創意に溢れる作品を期待する。（萬城評）

前衛書部　特選　大町　菜圓
何より清浄さを感じさせる。淡墨の量感あふれる筆線、墨色の美、構成の妙、どれもすばらしい。
◎前衛書部総評　構成ややマンネリ化。用具も工夫し、常に新しい表現を追求してほしい。（紅瑤評）

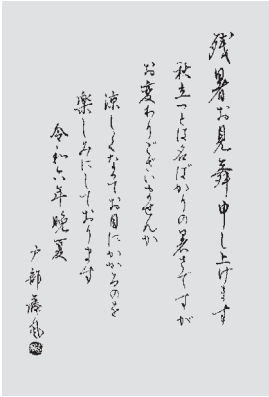
ペン字部　師範　佐藤　祥扇
端正な字形と抜群の布置によって、行間余白が光る立体感のある清澄な作品です。
◎ペン字部総評　カタカナは横線の角度を同じにして、字粒を揃えて漢字よりやや小さめに書くことで調和がとれます。（孝予評）



現代詩文書部　特選　佐藤　祥扇
やや硬さも感じるが、長鋒筆の性能を最大限引き出し、強弱のバランスの良い明るい作品となった。
◎現代詩文書部総評　漫然と言葉が並ぶのではなく、テーマを感じる作品を望みたい。（邑峰評）

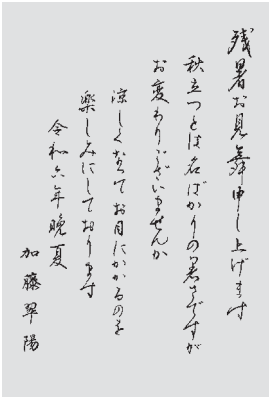
実用書優秀作品

選評　平川峰子



特選　戸部藤風

筆遣いが巧みで特に細線のリズムが伸びやかで美しい。



特選　加藤翠陽

落ちついた流れと達者な筆致が全体を明るく魅せて魅力ある作になった。

◎実用書部総評

見舞状を受け取った相手が嬉しい気持ちになる作品が多かった。字粒の大きさを考慮しながら行間をすっきり書き上げた錬度の高い作も多く、好感。

（峰子評）

特選

もく　戸部藤風
ここ　加藤翠陽
常盤　水津恵風
高真　岩上郁子
楓会　吉田裕

秀作（60音順）

もく　青木藤漣
誠和　石崎甘雨
東総　薄田春緑
墨洋　鈴木楽洋
千葉　竹浪叙舟
立精　千田白香
たか　浜野永篁
墨遊　日高宏雲
常盤　藤本尚子
八街　保谷美芳

佳作（60音順）

深大　石井光子
中川　大島竹鳳
青蓮　小野朱星
東向　菅野静代
梓江　佐藤祥扇
たか　猿渡篁右
秀畝　陳野原千鶴子

入選（60音順）

花祥　書泉掃雪
杉田　鈴木谿琳
祥風　津田李花
たか　樋泉雪篁
佑朋　中原純子
AI　堀江幸泉
椿翠　安嶋眞砂子
華仙　山口雪翠
紅瑤　雲雀秋山雄心
相澤敦子
八街　竹美秋
八生　虹川良子
玉川　石川佳代子
今永咲子
秀峰　宇井峰雪
誠和　鵜澤琴舟
遊山　宇治千賀
土気　臼井綾乃
蘭　大崎鉄舟
大雲　河合和敬
蘭鼎　川崎優子
玉川　神田加奈子
竹美　菊池恭子
深大　久下香奈
大阪　小林萩江
一新　小林萌佳

清月　墨友大雲
小林嘉江　佐川紅輝
佐々木美恵　鷺山美稍
八街　大雲
玉川　佐藤綾奈
竹原　代田葉子
澄春　新行内芳蘭
蒼陽　杉山明恵
伊呂　鈴木英晴
紅瑤　須田香舟
有秋　高橋千代子
竹清　江琴
深　大
多胡三千代
森地　田玉哲子
遊雲　東平絹子
もく　土居京仙
中島藤邑
紅瑤　原島春汀
八街　松重翠景
千葉　村上佳月
竹美　八木橋紀舟
やま　山口律子
さつ　渡邊順子

（選外347名氏名略）

現代詩文書部（特選）

選評　大平邑峰

花香　柔軟な動きと淡墨の妙味

翠　縦への流れを意識した作

雄一　落筆高く立体感に富む

紅霞　大らかさの中で細線響く

華邦　鋭利な線と文字方向の妙

四夏　穂先の効いた線と宿墨の妙

美悠　筆の開閉自在、抱懐広し

恭子　大小、潤渇、細太の妙味

雅悠　粘りある線紙に深く沈む

正　植物筆か、動きが面白い

一琴　素直な線、構成は大胆

杏邑　長鋒を操る技術の確かさ

祥舟　文字群で構成、余白美し

郁子　大胆な動きで詩情を表現

藤象　詩の情景が目に浮かぶ作

青仙　呼吸の長さと余白美が佳

李花　淡墨が紙に良く調和した

四峰　大胆な筆の開閉成功す

陽子　隷書的な動きで淡墨滲む

蒼風　筆勢よく紙面に響く線

前衛書部（特選）

選評　倉林紅瑤

紫千　潤渇の変化大きな広がり

みどり　筆線鋭く深く清涼感あり

雅悠　堂々たる筆勢意欲的な作

郁子　青淡墨美しくモダンな作

珠莉　空間処理巧み、細線効果的

初江　左右の二部構成響き合う

光琴　力感・躍動感あふれる快作

咏艸　軽妙な運筆のリズムが魅力

華舟　雄大で豪快な筆致みごと

浩美　古紙に淡墨の筆線が躍動

今月の

特別研究部優秀作品（特選）

選評　小竹石雲　後藤大峰　平川峰子　山口仙草

小品の部

現代詩文書（もくせい会）
西川藤象
「田村つねのうた」

西川藤象書

137×35㎝

◆鋭い線の切れ味が深秋の世界をうたいあげている。無理のない字形の変化と、流れが自然で一層静寂感を漂わせ、心静かに拝見できる見事な作。（石雲評）

前衛書（華芳社）
庄司紫千
「思い」

庄司紫千書

135×35㎝

◆活力のある線質の作で起筆から一気に吹き上げるエネルギーが魅力的な作。3つの塊が互いに呼応し全体を引き締めている。（仙草評）

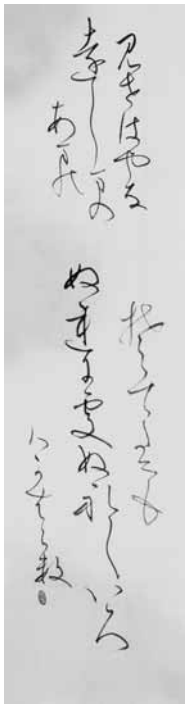
臨書（大雲）
神谷雲卿
「雁塔聖教序」

神谷雲卿臨

136×35㎝

◆起筆、収筆、逆筆、どれを取って見ても確実に書き進めていて、さらに独特な野線の引き方が、効果的に作品の質を引き上げている。（大峰評）

かな（奥田）
和県瑤芳
「見せばやな」



和県瑤芳書

135×35㎝

◆2部構成の余白の出し方が巧み。連綿の流れに日頃からの錬度をうかがい知ることができる。墨量の変化が作品全体を立体的に見せて美しい。（峰子評）

〈小品の部〉

創作の部（43点）
漢字―8点
かな―4点
現代―19点
篆刻―0点
前衛―12点
臨書の部（42点）
漢字―37点
かな―5点

総出品点数 85点

〈特選候補者〉

（創作の部）
「漢字」
麗澤　長谷川翠
四枝及川豊流
「現代詩」
四枝奥川麗流
誠和石崎甘雨
蒼風笹木蒼風
陽陽岩崎陽光
四枝伊藤四夏
「前衛」
大拙佐藤陽子
大拙佐藤みえ子
恵月重村恵月
（臨書の部）
「漢字」
千葉平野笛舟
東総薄田春緑
八街松華泉
小映豊岡藤瓊
もく嶋部勝
八街三浦英樹
澄春土屋恵仙
澄春玉渕良章
華祥深澤佳月
千葉竹浪叙舟
「かな」
竹美八木橋紀舟
清月境野和子

大作の部

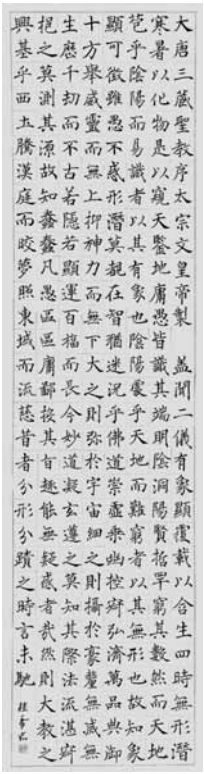
前衛書（紅瑤）
廣田　紫
「翔」

180×60㎝

廣田　紫書

◆濃墨による大胆な筆致の作で、文字造形の変化を意識した堂々の作となっている。余白の美しい爽やかで見応えある作品。（仙草評）

臨　書（英峰会）
佐藤桂香
「雁塔聖教序」



175×45㎝

佐藤桂香臨

◆原帖の高雅な雰囲気を一縷の隙もなく臨書している。その手腕は見事の一言である。非常に明るく、爽快感すら感じる作。（大峰評）

現代詩文書（宗苑）
臼井真理
「北原白秋の詩「夜」」

240×80㎝

臼井真理書

◆いくつかの字群を紙面の右に寄せ、字塊が淡墨の「夜」の世界を表現している。字群間、左側の余白に作家の生命感を想う。（石雲評）

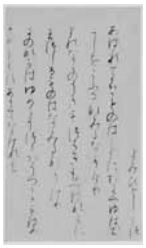
◆誰もが認める第三種の美しさをよどみない運筆で見事に臨書。難しい渇筆部もしっとりとした線条で表現し、格調高い。（峰子評）

臨　書（伊呂）
鈴木英晴
「高野切第三種」

鈴木英晴臨

53×227㎝

部分拡大



〈大作の部〉

創作の部（37点）
漢字―2点
かな―6点
現代―8点
前衛―21点
臨書の部（7点）
漢字―6点
かな―1点

総出品点数 44点

〈特選候補者〉

（創作の部）

「漢字」
大拙　畠中　成山

「かな」
奥田　森川　紫木
奥田　小林　溪姫
水茎　清水　蘭舟

「現代詩」
光風　千葉　光泉
玄宵　尾形　紅霞
翠苑　佐々木豊苑

「前衛」
声香　尾河　紗香
秀水　門脇　信子
紅瑤　川田　弘子
水茎　中野　柳明
月華　浅野　玉翠
容洲　阿部　邑里
若葉　工藤　山房
月華　成田　結斗
月華　浅野　涌翠
蓮紅　小野寺　洙紅
紅瑤　竹内　成美

（臨書の部）

「漢字」
紅瑤　相澤　敦子
素雪　坂本　芳博

漢字研究部
（雁塔聖教序）

選評　名越蒼竹

今月のホープ作品

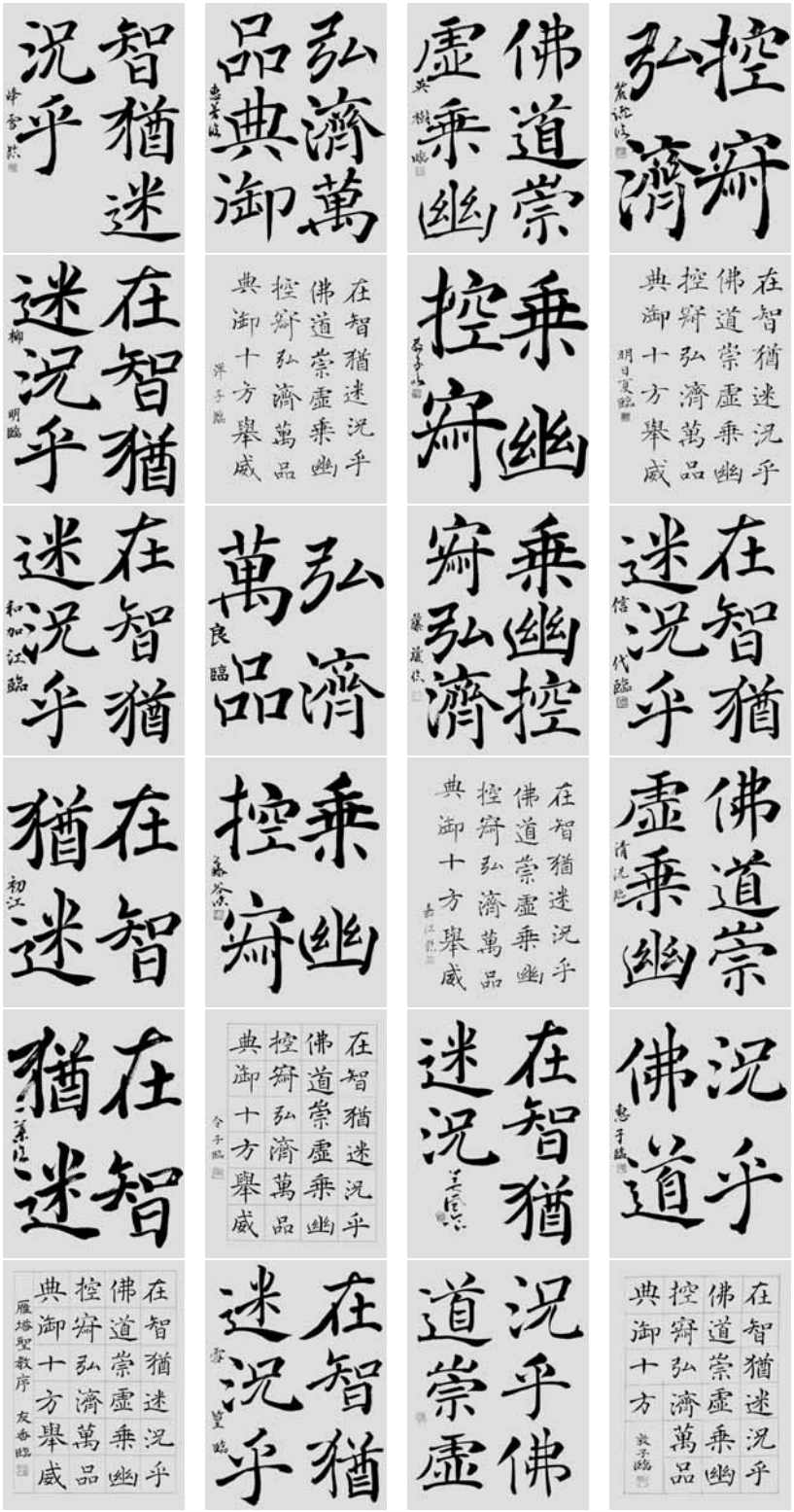
相楽天翔

漢字研究部　特選　相楽天翔

用筆・運筆の特徴をふまえ、課題古典の特長を忠実に再現した素晴らしい臨書であり、半紙に6文字を収めた章法も優れている。送筆部で筆を吊る要領が上手く、線が浮いていないところにも技術の高さが感じられる。

◎漢字研究部総評

初唐三大家の楷書は書を学ぶ上で基本中の基本であり、その書き分けは是非とも自らのものにしたい技術です。今回の出品数は少し減りましたが、課題古典の特長を踏まえた上位作品と、入賞に届かなかった作品との差はかなり開いていました。「古典鑑賞」で紹介される漢字研究部では、その古典の特徴を知り、部分練習を繰り返してから清書に向かいましょう。落選となった作品にも字は上手と思われる人の書もあり、残念でした。



麗流　明日夏　信代　清洗　恵子　敦子

英樹　恭子　藤瓊江　嘉美風　清美耀

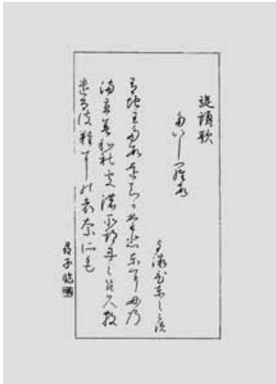
恵芳　洋子　良子　藤谷　令子　雪篁

峰雪　柳明　和加江　初江　一葉　友香里

かな研究部
（高野切第三種）

選評　酒寄光子

今月のホープ作品



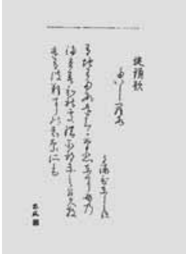
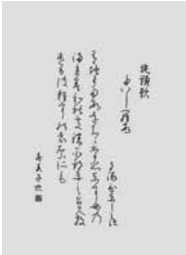
滝澤尋子

かな研究部　特選　滝澤尋子

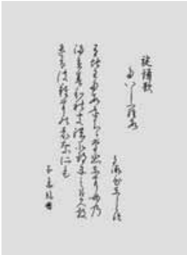
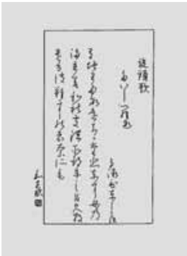
線の太さ細さや墨の濃淡を注意深く捉えています。高野切第三種の流麗で洗練された線質が良く表現されました。

◎かな研究部総評

全体的には間違いも少なく良く書けていました。筆先の摩耗した筆や濃墨では繊細な線を書くのは難しいです。良くチェックして書き始めましょう。

朗　寿美子　美梢

佳恵　谷恵　和子

清耀　嘉江　和子

恵子　綾奈子　れい子

かな研究部成績表

特選

清月　◎滝澤尋子
上泉　早部朗
紅風　田畑寿美子
大雲　鷺山美梢
桜草　苗代佳恵
もく　本郷谷恵
清月　境野和子
大雲　礒貝清耀
清月　小林嘉江
上泉　粕谷和子
菊月　新井恵子
玉川　佐藤綾奈子
清月　高山れい子
潮音　齋藤杏邑
伊呂　鈴木英晴
蓮紅　本田美雪
竜泉　高橋雅泉
上泉　叶野洋子
長月　原澤典子
祥紫　北村登志子
上泉　本多和枝
正華　加瀬明日夏
紅瑤　須田香舟
こゝ　加藤翠陽
紅瑤　藍澤白珧

秀作（50音順）

仙台　熱海桃翠
もく　新井藤雪
千葉　猪又理扇
高真　梅山久子
高井　榎田和子
書游　小野寺みよこ
樹原　葛恵美

佳作（50音順）

東向　菅野静代
菁湖　北嶋菁湖
こだ　北爪鼓祥
竹原　久根崎美登里
青蓮　熊谷竹鈴
一心　小坂素子
こだ　小松崎千恵子
蕙書　坂本里美
書泉　七五三木和美
竹原　代田葉子
澄春　新行内瑞華
祥紫　杉田睦子
沙莉　瀧口すみ子
清月　竹澤恒子
有秋　武山花源
やま　田玉哲子
玉松　田中耶衣子
上泉　塚本ちえ子
竹扇　寺前華扇
清月　徳江淳子
もく　戸部藤風
麗澤　富田瑶翠
一心　錦織あさ子
高崎　根本雅子
上泉　萩原洋子
祥紫　船木悦子
紅風　船津美代子
大雲　堀切幸雲
石習　松丸愛石
白露　松村陽子
椿翠　安嶋眞砂子
玉川　谷知裕美子
こだ　山根美嶺
楓会　浅井和江

入選（50音順）

堺　石田悦子
日新　石橋嘉子
静翠　井上智美
橋雅　伊与田玉泉
澄春　岩瀬祥園
誠和　鵜澤琴舟
こだ　梅原虹祥
青蓮　小野朱星
大雲　片山恵風
華祥　加藤雅芳
大雲　河合和敬
蘭鼎　川﨑優子
華仙　菊地恵水
清月　木暮純子
華仙　木島幸風
蒼陽　熊井宏子
竜泉　呉豊美
大雲　黒柳竹葉
華祥　小泉潤
墨花　小口智子
高真　木暮美紀
奥田　小林渓姫
樹原　近藤淑子
遊山　紺野遊山
芳蘭　斉藤江彩
素雪　坂本芳博
聖堂　佐久間洋子
光彩　櫻田龍貞
たか　猿渡篁右
花祥　杉田祥風
玉川　関根美代子
墨縁　武田宗楓
春汀　渡子紀子
誉田　中野恵美子
上泉　中村シゲ子
氷壑　永井悦子
大雲　名取美紬
もく　西川藤象
青蓮　沼田奎心
麗澤　長谷川翠
東向　畠山芝香
一弦　早坂聖朋
琇韻　林美奈子
高真　松尾有希子
梓江　松永珠鈴
琇韻　山縣令子
華仙　山口雪翠
高井　吉田ゆりか
恵泉　渡邊信代
唯一　逢沢唯一
玉松　青木葵郷
松村　青木玉枝
もく　青木藤漣

文筆　青木知子
京橋　東花子
洞書　安藤楊風
清月　飯島トミ子
水海　飯泉洋子
福山　池崎和美
一心　石森博子
華祥　板垣青鳳
花舞　伊藤悦子
わか　伊藤幸子
八街　井ノ口春峰
たか　岩﨑篁葵
葛城　宇野澤萌
AI　生方由美子
たか　梅津佳代子
玉川　上横手真美
渡辺　大沢淳子
秀畝　大野千鶴子
蕙書　岡村由紀子
玄穹　尾形紅霞
大阪　荻田良風
明漢　小澤和子
旭老　加瀬晴美
書泉　片岡照徳
正華　金田真優
春汀　河村幸子
秀畝　木下千壽子
うる　木村順子
秀畝　小池直子
高崎　小板橋理恵
大阪　小林萩江
高崎　小峰美加子
蒼陽　込山美艸
梓江　権代雪華
春汀　佐々木和子
〃　佐々木淳子
書径　佐々木浩子
声香　笹野徳子
秀畝　椎名光子
八雲　七條裕美
八生　篠田恵美子
正華　柴田洋子
蘭鼎　島田貴子
堺　嶋田記枝
水茎　清水蘭舟
映紅　菅野映紅
書泉　鈴木谿琳
鈴木睦心
麗澤　須藤萩雨
前橋　関マツ
水茎　高岡秀汀
紅瑤　高木百合子
華祥　髙木昭華
甲和　髙藤松美

選外

146名　氏名略

澄春　高橋幸苑
千葉　玉沢幸子
生大　田村春華
立精　千田白香
たか　樋泉雪篁
中江みよ子
文月　仲川信夫
一葦　中村一琴
春汀　中山知子
書泉　永井伯泉
土気　西澤瑠美
白露　野口久美子
幸扇　野村幸城
はせ　長谷久子
濱嶋久幸
たか　浜野永篁
正華　林喜美子
佑朋　原祐子
華祥　樋口玉葉
大雲　日髙右真
誉田　平野和江
高真　廣瀬幸枝
澄春　深澤佳月
〃　深堀清洸
大雲　藤井花香
粋仙　藤井龍仙
常盤　藤本尚子
橋雅　藤原瑩子
澄春　増田華秀
楓会　松坂美津江
幕張　松島翠舟
文月　三浦真翠
椿翠　三上裕子
華祥　三澤美智子
中川　三田蒼舟
生大　宮下樂翠
春汀　宮野鼻満津枝
八街　村上佳月
一弦　村上美智恵
あか　本吉明香
もく　森田藤谷
清月　森奈都恵
高崎　矢口登江
明香　矢部香苑
やま　山口律子
青蓮　山﨑恵
幸扇　山本梅香
東伯　山本真紀
竹美　横山蘭舟
昌苑　吉田翠綾
こだ　吉野桜佳
〃　吉野彩祥
千潟　渡辺泰瑛

審査会員の部　結果発表（出品数 漢字33点・かな16点）

選評　種谷萬城・下谷洋子

〈次点・50音順〉

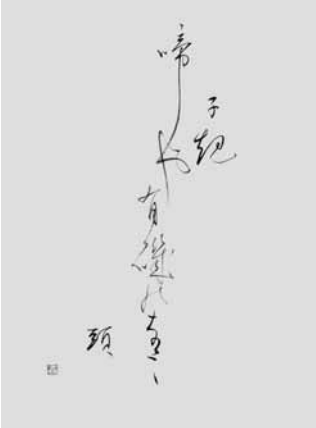
竹浪　叙舟

石崎　甘雨

土屋　恵仙

江本　興舟

鈴木　英晴



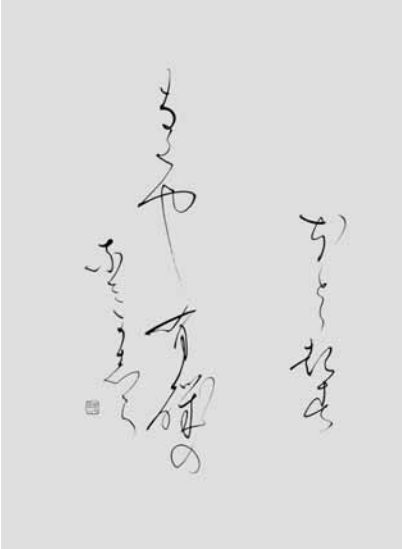
佐藤　一義

漢字秀逸作

森田藤谷

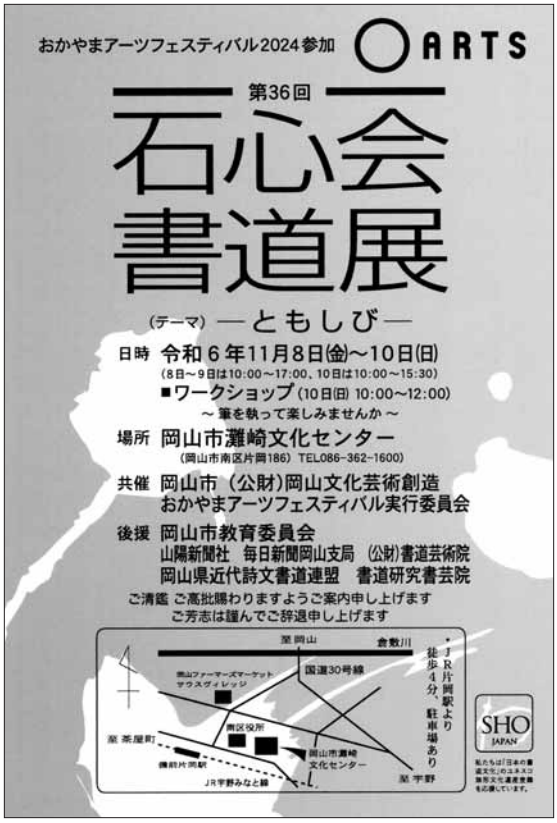
軽妙なリズムが生み出した線は、細太、曲直、軽重、潤渇の変化が絶妙で、表情豊か。全体のバランスも良く、品性の高さを感じさせる。　（萬城評）

かな秀逸作



石崎甘雨

かなり個性的で斬新な３点の中で、特にこの作は危うい部分もあるが、思い切った大胆な動きが突出していた。かなの原則を生かした発想の豊かさに拍手。　（洋子評）



「昴」150×95㎝
2002（平成14）年　村野大仙書作展
村 野 大 仙

〈おわびと訂正〉

本誌9月号13ページの「墨魂の群像」の作品紹介のうち、村野大仙先生の作品の題名が間違っておりました。おわびして訂正致します。

書展のご紹介について

。予　告

後援申請書を書展会期2ヵ月前までに提出して下さい

。報　告（訪問記）

400～450字程度（1行17字詰）

会場風景、作品写真等2枚まで

・写真の裏にキャプションを必ず明記して下さい。

・書道芸術院後援の展覧会に限らせていただきます。お知らせのあった書展のみ掲載いたします。

・訪問記掲載の場合、編集部まで事前にご連絡下さい。

編集部

後援申請について

後援申請をされる場合、**書道芸術院所定の申請用紙**でお願いします。

事務所にご連絡いただければお送りいたします。

・代表の方の団体、社中における役職名を明記して下さい。

書展

「坂本素雪こころの書展」を訪ねて
線と空間……そして叙情

江本興舟

会期＝令和6年7月25日(木)～28日(日)
会場＝セントラルミュージアム銀座

7月25日(木)、書展開催の初日、ギャラリー・トークが催されました。会場は満席、来賓の室井玄聳先生、原田凍谷先生が紹介され、千葉蒼玄先生の司会進行で素雪先生の作品制作に向けての題材選び、心がけている事等の質問から始まりました。素雪先生は多くを語らず、訥々と言葉を選びながら答えられました。その一つ一つを聞き逃がさぬよう、皆さん熱心に耳を傾けていました。

素雪先生のこの展覧会を開催する目的は、「一般の人に書展を楽しんで見て欲しい。書家のための書展ではなく、一般の人達を巻き込む書を書きたい。それには詩を選び、詩の中のことばを表現すること。そして変化して行く面白さを伝えたい。」と話されていました。会場でまず目を奪われたのは正面の大作「武力で平和は作れない」。戦争を憂い、皆さんにも考えて欲しいとの先生からのメッセージ。文字の反転、交錯、これらの文字が虐げられた人々の苦しみ、怒りを表現されているように感じられ圧倒的な威圧感でした。右側の大作「雨」。霧雨、驟雨、豪雨、どんな雨か想像しながら見入ってしまいました。超長鋒でスッと線を引く、白い紙面をよく見ると微かに線が見える「心の叫び」「白と黒」の表情。牛耳筆、山馬筆で書かれたか、荒々しい「不滅」「世界滅亡」。多種多様な筆で、荒々しく、時には飄々とまた洒脱に。

様々な表現の中に故郷を思う心を感じると同時に、言い知れぬ怒りを作品の中に見る時、書は心の表出、思いの深さであることが感じ取れました。自作の木筆で地方の訛りを書いた作品の数点に言葉の面白さ、楽しさを味わいました。思わず立ち止まって見たくなる書。素雪先生の心意気が数々の作品から伝わり、感銘を受け、同時に自分自身の書制作への刺激となりました。明確な表現とは何かを考えながら、引きも切らぬ来客の熱気を背に会場を後にしました。

大作「武力で平和は作れない」

参観者でにぎわう会場

ギャラリートークのひとこま

第59回 竹扇会書展

飯田春香

会期＝令和6年9月14日(土)～16日(月・祝)
会場＝大阪産業創造館（3階マーケットプラザ）

9月半ば残暑厳しい中、第59回竹扇会書展が開催されました。テーマは「つなぐⅢ」

会場に一歩足を踏み入れるとまず篆刻作品が8点整然と並び暖かく迎えてくれました。さらに中へと進むと正面には推薦作家の井戸三扇先生の淡墨作品で「慈光」。河岡北秀先生はロール紙に超濃墨で書かれた「天空海闊」の大作が堂々と並んでおり圧倒されました。両先生に制作過程等のお話を伺うと、ご苦労の中にも気迫と奮闘ぶりが想像され、この酷暑の中、さぞ大変だったろうなと感動も感心もしました。

又、会長、小伏小扇先生はしっとりとした、墨色と滲みの美しい「自」。その横には竹村先生の遺作「吉祥」が。鋭く厳しい線質で対照的な作品が並びご夫婦で永年取り組まれてきた甲骨文字に感銘を受けました。

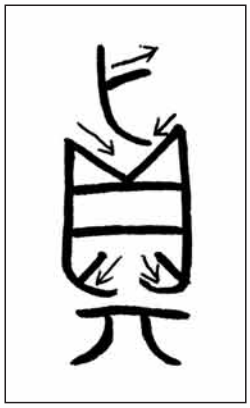
会場いっぱいに竹扇会会員の皆さんの多彩な表現の作品群、一つ一つの作品の下には作者それぞれの顔写真とともにコメントが添えられており、共感したり、納得したりと楽しく読ませて頂きました。

来年は60回展を迎えられます。今から次はどのような作品を見せてくださるのかと期待に胸を膨らませて会場を後にしました。

会長ご夫妻の作品と小扇先生

会場風景

推薦作家のお二人



「真」の2・3・4・9・10画目の方向を示しました

◎「只」の2画目と3画目は下部で重なっても構いません

◎縦画は「上から下へ」横画は「左から右へ」が基本になります

全日本書道連盟主催

書道講演会 開催のご案内

日　時　令和６年11月７日（木）午後２時～３時半

会　場　国立新美術館　３階講堂（東京都港区六本木）

東京メトロ千代田線「乃木坂駅」６番出口に直結
当日は同美術館で、第11回日展開催中です

演　題　「王羲之の眼差し、王羲之への憧憬」

講　師　九州国立博物館 館長　富　田　　淳（とみたじゅん）氏

定　員　250名（聴講無料）

どなたでも聴講できますので、聴講ご希望の方がおられましたら、電話／FAX／メールで聴講希望人数をお知らせください。
下欄にご記入の上、FAX送信ください。

申込先　連盟事務局　**電　話**　03-5294-1371（月～金曜 10：00～18：00）
ＦＡＸ　03-5294-1372（24時間受信）
E-mail　zsr@shoren.jp

（団体または代表者名）＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

（聴講者数）＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿名

（連絡先電話番号）＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

お願い事項

※「書道芸術」競書出品するためには、バーコード出品券が必要です。

○**新規登録**（無料）

○**再発行申請**（有料：500円分切手）紛失・破損・支部・氏号変更

○**登録内容変更**（無料）住所・電話番号変更・指導者名変更

各種申請用紙は、事務所までご請求ください。

指定形式以外の申し込みは、お受けできません。また、バーコード出品券に訂正されても変更できませんので、**必ず手続き**をして下さい。

※書道芸術院
創立記念日

講演会のご案内

記

日　時　令和6年11月23日(土)・(祝)
午後13時半より講演（受付13時～）

講　師　伊藤　滋　先生（木鶏室）

福井県生まれ。東京学芸大学書道科卒業。同大学院社会科（東洋史）修了。
中国書道史・碑法帖研究を行う。
「書道芸術」等にて執筆を行う。

演題　（仮題）「最近の碑法帖名品拓本の動向」

会　場　上野精養軒　3階「桜」の間
〒110－8715　東京都台東区上野公園4番58号
TEL：03－3821－2181

主　催　（公財）書道芸術院

定　員　先着150名（会場の関係で先着150名で締め切ります。）

申込方法　下記申込用紙に氏名を記入の上、FAXまたは郵送で書道芸術院事務局にお申し込みください。

申込締切　令和6年11月15日(金)　厳守

参加申込書

※例年郵送していました参加申込書は郵送いたしませんので、こちらでお申し込みください。

氏名を記入の上、FAXまたは郵送で書道芸術院事務局にお申し込みください。
審査会員・審査会員候補・無鑑査・一般の方、どなたの参加も聴講無料です。

11月15日（金）　締切厳守

氏　　名	氏　　名

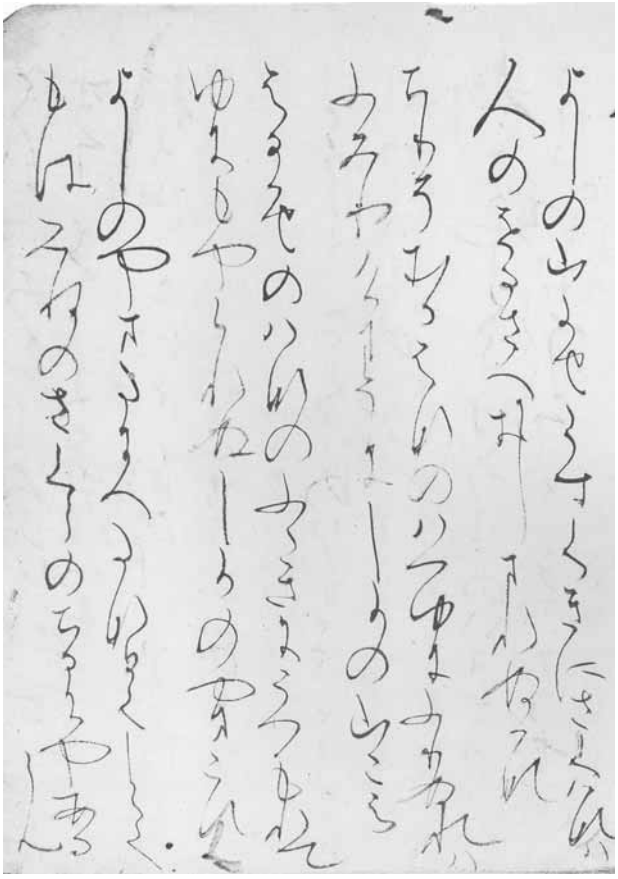
FAX　03-3862-1957

予告　2024・11月号（763）の「古典鑑賞」・「古筆鑑賞」の課題

（12月10日締切）

古筆鑑賞 ㉘

山家心中集（伝 西行筆）②



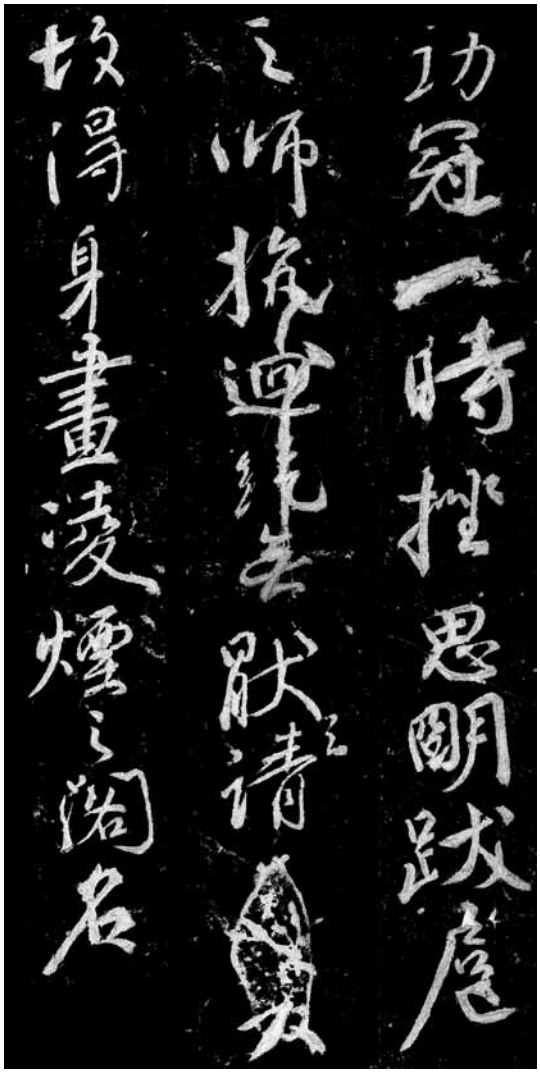
（掲載図版・70%に縮小）

〈よみ〉

よしの山かぜこすくき　にさくはなは／人のを
るさへおしまれぬかな／ちりそむるはなのはつ
ゆきふりぬれば／ふみわけまうきしがの山ごえ
／はるかぜのはなのふゞきにうづもれて／ゆき
もやられぬしがのやまごえ／よしのやまたにへ
たなびくしらく／もはみねのさくらのちるにや
あるらむ

古典鑑賞 ㊹

争坐位文稿（顔真卿）②



（掲載図版・70%に縮小）

功冠一時。挫思明跋扈／
之師。抗迴紇無猷之請／
故得身畫凌煙之閣。名

※規定部の「漢字部門・初段以上」と「かな部門・初段以上」に『審査会員の部』があります。出品票に「審査会員」と記入して下さい。

競書出品規定

●規定部

部門	段級位	用紙	書体・内容
漢字	初段以上	半紙	創作（書体自由）
漢字	秀級以下	半紙	創作（楷書）
かな	初段以上	半紙（料紙も可）	創作
かな	秀級以下	半紙たて½（料紙も可）	臨書（写真掲載の全てまたは部分を書く）
漢字条幅	初段以上	半切	創作（書体自由）
漢字条幅	秀級以下	半切	創作（書体自由）
かな条幅	師範〜10級	半切（料紙も可）	創作
ペン字	師範〜10級	はがきサイズ	書体自由

●研究部

部門	用紙	書体・内容
漢字研究	半紙たて	掲載の古典の臨書、文字数自由（掲載部分以外の箇所は不可）
かな研究	半紙たて（料紙及び料紙貼りつけも可）	掲載の古筆の臨書、歌1首以上を書く、全文も可（掲載部分以外の箇所は不可）

●実用書部

〈出品規定〉

○用紙　半紙横½（24.5×16.5㎝）、B5コピー用紙縦（26×18.1㎝）も可。

○課題　掲載語句を書く。

○毛筆小筆、筆ペン、サインペンも可。

※規定部から実用書部までは、月別出品券を貼ったバーコード券を、作品の右下にヤマトのりで貼る。

※特別研究部は所定の出品券を、作品の右下にヤマトのりで貼る。

●出品資格　高校生以上

●月例競書作品出品の心得

1、**締切日必着厳守**

2、月別出品券を貼付していないバーコード券は認めない

3、月別出品券のコピーは不可

4、(一)**初めて**出品のときは「**新**」

(二)**2回目**出品のときは**10級欄を参照**

○印は昇級（1級上の級を書く）

(三)「課題違反」・「落款なし」等の違反作品は審査対象外とし、**違反作品として氏名を掲載します。**

※▲印段級誤記入

※△印作品審査後着

＊記入する数字は、級位は算用数字1、2、3…段位は漢数字　初、二、三…で書いてください。

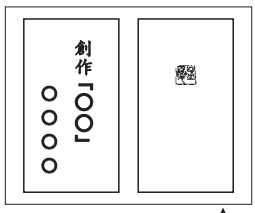
＊級位の方は、出品する月の本誌（最新号）で成績を調査確認の上、級を記入してください。確認できないときは、**現在級を書き「未調査」**と明記してください。

●前衛書部

半紙縦使用に限る。

●現代詩文書部

半紙縦使用に限る。



●篆刻部

〈出品規定〉

①**摹刻**〈ア．**課題による語句**
　イ．**原印は自由**
　（必ず原印のコピー添付）

②**創作　語句は自由**

○印面の大きさは2.3㎝（八分角）以内とし朱文、白文自由。

○印箋については市販のものでも、半紙横½の大きさに切ったものでも可。（上の例参照）

○摹刻と創作の両方に出品することはできない。どちらかを選ぶこと。

●特別研究部

特別研究作品			
	A．大作の部		B．小品の部
	創作	臨書	創作	臨書
作品サイズ	○毎日展審査会員・会員サイズ以内（縦横自由） 1．242㎝×61㎝（8尺×2尺） 2．182㎝×79㎝（6尺×2.6尺） 3．176㎝×85㎝（5.8尺×2.8尺） 4．121㎝×61㎝（4尺×2尺） 5．136㎝×106㎝（4.5尺×3.5尺） 6．その他 毎日展一般公募サイズ・全紙も可		1．小画仙半切以内、半切⅓以上 2．全紙½（約68×68㎝）以内も可 （縦横自由）	
内容	漢字・かな・現代詩文書・前衛書の各部門の創作作品競書	書道芸術掲載研究部 古典鑑賞（漢字研究） 古筆鑑賞（かな研究）の臨書作品競書 **※掲載以外の部分可**	漢字・かな・現代詩文書・篆刻（八分角以上）・前衛書の各部門の創作作品競書	書道芸術掲載研究部 古典鑑賞（漢字研究） 古筆鑑賞（かな研究）の臨書作品競書 **※掲載以外の部分可**

※「特別研究部」大作の部・小品の部（創作・臨書）1人1点出品

昭和五十年一月二十七日第三種郵便物認可
令和六年九月二十五日印刷
令和六年十月一日発行
（毎月一回一日発行）　書道芸術　第七六二号

●篆刻
【11月15日締めきり】

〈出品規定〉

①篆刻　㋐課題による語句
　　㋑原印自由
　　（出品の際、原印のコピー添付）
②創作　語句自由

○印面の大きさは2.3㎝（八分角）以内とし朱文、白文自由。
○印箋は市販のもの、半紙横1/2の大きさに切ったものも可。
○応募は①か②のどちらかとする。

10月号　篆刻課題

〈原印コピー〉

齊白石

「齊白石」

今回は7分角サイズの印材を使用するとよいでしょう。

◉出品方法

用紙の右側に押印し、左側に印影の釈文を明記、並びに落款（氏号）を入れる。

760号篆刻優秀作品

選評　後藤大峰

篆刻特選　庄司櫻空

「非児」

原印の雰囲気をよく捉え、運刀も佳く、しっかりした作品です。

創作特選　西川翠嵐

「地平天成」

構成の佳さ、刻線の手腕など、どれを取っても素晴らしい作品。

（篆刻）

特選　蒼原　庄司　櫻空

秀作（50音順）
大雲　小沢　華仙
〃　鷺山　美梢
白琉　平塚　由香

佳作（50音順）
大網　片岡　豪峰
石心　成田　能喜

入選（50音順）
生大　吉原　進
（選外1名氏名略）

（創作）

特選　墨宣　西川　翠嵐

秀作（50音順）
新栄　加藤　万丈
やま　橋本　清麗
粋仙　藤井　龍仙

佳作（50音順）
唯一　逢沢　唯一
石心　伊藤　祥花
生大　中畠　義則
趙雲　吉田　恵弦

入選（50音順）
遊雲　赤星　文庵
秀恵　阿部　雅悠
香書　須賀澤一起
（選外なし）

◎篆刻部総評

今月は少し作品数が伸びず残念な感は否めませんでした。数少ない中、大変秀れた作品、特に創作に目に付いたものがありました。（大峰評）

今月の注目作

加藤万丈

「天長地久」

◎郵便物・清書・送金・一般事務等は
〒101-0031
東京都千代田区
東神田1―16―7
東神田プラザビル3階
公益財団法人 書道芸術院
電話（03）3862―1954
FAX（03）3862―1957

ご連絡等は月曜日～金曜日 10時～16時 の間にお願いいたします。（土・日・祝日は休み）

送料

1か月の購読部数が1部～9部までの1回の郵送料

1部	79円
2部	95円
3部	103円
4部	119円
5部	135円
6部	151円
7部	167円
8部	183円
9部	199円

10部以上は送料免除

令和六年九月二十五日印刷
令和六年十月一日発行
定価　1部　七五〇円
編集兼発行人　下谷洋子
データ処理　株式会社リンクス
印刷　小沢写真印刷株式会社
発行所　公益財団法人 書道芸術院
〒101-0031
東京都千代田区東神田1-16-7
東神田プラザビル3階
電話（03）3862-1954
FAX（03）3862-1957
振替　00150-4-135058
ホームページアドレス　http://www.lincs.co.jp/shogei/